

インクルーシブ教育システム推進に向けたフライングディスクを 題材とした交流及び共同学習の理論と実践（Ⅰ）

－5 観点による総合的質的授業分析からの検討－

大阪府立和泉支援学校 長澤 洋 信
岡山県立岡山瀬戸高等支援学校 蜂谷 晃 平
大阪教育大学附属特別支援学校 浅間 耕 一
国立特別支援教育総合研究所 平沼 源 志
大阪教育大学 富永 光 昭

Ⅰ. はじめに

平成 19 年 8 月に改正された障害者基本法の第 14 条第 3 項において、「国及び地方公共団体は、障害のある児童及び生徒と障害のない児童及び生徒との交流及び共同学習を積極的に進めることによって、その相互理解を促進しなければならない」と明記され、交流及び共同学習の推進が図られてきた。平成 28 年 12 月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」においては、学校教育全体で障害者理解や交流及び共同学習の一層の推進を図るため、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」と関連づけた取り扱いの重要性が示され、交流及び共同学習の学習活動の具体的検討が大きな課題となっている。

このようななか、知的障害特別支援学校である大阪教育大学附属特別支援学校中学部においては、平成 24 年度より総合的な学習の時間の授業として、大阪教育大学附属平野中学校との交流及び共同学習を実施しており、平成 28 年度ではフライングディスクを題材とした交流及び共同学習を計画している。中学生を対象とした交流及び共同学習に関する先行研究としては、石川・田口・高濱・北村・森・佐藤・堺・長友・野坂・吉田・高橋（2016）が、中学校と特別支

援学校中学部の「交流会」の取り組みを中心に検討し、事前学習の不十分さや「交流会」の回数等の改善点を報告している。また小野（2014）は、通常学級の生徒の意識が、特別支援学級の生徒との学校行事等での交流及び共同学習を通じてどのように変化するかを調査し、肯定的な意識を高めるためには、継続的な取り組みや互いを意識する活動が必要であることを指摘している。以上のような中学生を対象とした交流及び共同学習の先行研究がみられるものの、実際の授業を精細に分析した研究はわずかに散見する程度であり、特に特別支援学校中学部と中学校の授業を分析対象とした研究はほとんどない。

そこで本稿では、大阪教育大学附属特別支援学校中学部と附属平野中学校とのフライングディスクを題材とした交流及び共同学習を対象として、総合的質的授業分析により授業局面ごと及び授業全体の分析と考察を行う。総合的質的授業分析においては、授業構成要素として「目標」「教材」「教師の指導性」「生徒」「環境」の 5 観点を設定し、特に「目標」と他の観点との関連性や課題を中心に考察を進める。

Ⅱ. 研究方法

1. 対象

大阪教育大学附属特別支援学校中学部(以下、

附特支) 1・2・3 年生 17 名と、大阪教育大学附属平野中学校 (以下、附平中) 2 年生 19 名が参加する交流及び共同学習の授業を対象とする。この附平中生徒の 19 名については、附平中で総合的な学習の時間に実施している「JOIN」(生徒自身が探求したいテーマを選び学習を進めていく)の単元において、障害に関わる他者理解をテーマに選んだ生徒たちである。

2. 方法

授業は、目標(単元目標・授業目標・各活動のねらい)、教材、教師・生徒の配置等の環境が相互に関連するなかで、教師の指導性を軸に展開される。そのため授業研究においては、生徒の表情や動き、発言、教師(集団)の指導性、教材、教室環境といった細かな要素とそれぞれの相互関係を把握し、授業のダイナミズムを考察することが重要である。特に発語等の表出が少ない知的障害のある生徒を対象とした授業においては、精緻かつ授業全体構成要素の関連を明らかにした記録と分析が必要である。そこで、富永・樋口(2009)が実施した「総合的質的授業分析」を分析手法として採用し、授業全体レベルから各生徒の活動レベルまでを、総合的かつ質的な側面から分析することにした。

本研究は、附特支と附平中との交流及び共同学習の様子(第4次/10時間)を定点でビデオ撮影し、指導案等の資料と関連づけて記録・分析・考察を進めた。記録では、授業構成上重要な局面を「授業局面」として捉え、授業での発言や活動を時系列で整理・記述した。分析・考察では、授業と学習活動を構成する観点として「目標」「教材」「教師の指導性」「生徒の状況」「環境」の5項目を設定して、特に「目標」と他の構成要素との関連、授業全体の課題や改善点を明らかにした。なお、第3・4・5局面は、グループごとの活動であったため、附特支生徒の障害程度が中度であり、生徒同士の関わりに教師の支援が必要なBグループを分析対象として、活動を記述した。

考察においては、5観点の間にある相互関係、特に「目標」と他の観点との間にある関連性や課題を中心に、授業のダイナミズムを把握しながら、各局面及び総合的観点で課題や修正点を明らかにした。

III. 交流及び共同学習の授業計画

1. 本単元の概要

総合的な学習の時間の取り組みである本単元では、附特支と附平中の生徒が同じ学習目標に向かって考え、互いに支え合ったり意見を言い合ったりするような学習活動を通して、共に生きる関係性を構築することを目指し、年間を通じて交流及び共同学習に取り組む(表1「本単元の授業計画」参照)。

1 学期にはフライングディスクを題材として「どのようにすればフライングディスクを、ねらった場所に飛ばすことができるか」を共通の目標に、附特支と附平中の生徒が協力し合いながら考え、実践する中で交流を深める。2 学期には、生徒のアイデアをもとに学習内容を設定し、協力して活動を進め、実践する中で相互理解を深める。

3 学期には、近隣の小学校において、附特支と附平中の生徒がこれまでの交流及び共同学習の取り組みを発表する機会を設定し、本単元の学習成果をまとめる学習とすることにした。発表会では、小学4年生の児童を対象に40分程度の時間を設け、附特支と附平中の生徒が各グループでの活動をそれぞれ報告するという内容を実施した。活動にあたっては、毎回同じグループで活動できるように、附特支と附平中の生徒を3つのグループに分けて設定した。なお、附特支のグループは知的障害の程度が同じくらいの生徒でグループを編成した。また、活動の際には全体の目標と合わせて、グループごとの目標も設定している。

2. 本小単元設定の理由

今年度の附特支の参加生徒は、男子11名女

表 1. 本単元の授業計画（全 10 時間）

5/13	①FaceTime を利用した交流（各校にて）
6/10	②フライングディスクを通した交流 ①
6/24	③フライングディスクを通した交流 ②
7/1	④フライングディスクを通した交流 ③
9/30	⑤グループ別課題(地図づくり・創作ダンス・昔遊び) (1)
10/28	⑥グループ別課題(地図づくり・創作ダンス・昔遊び) (2)
11/18	⑦グループ別課題(地図づくり・創作ダンス・昔遊び) (3)
1/13	⑧FaceTime を利用した交流（各校にて）
1/27	⑨発表に向けての資料づくり
2/3	⑩近隣小学校での発表会

子 6 名計 17 名で構成されている。新版 S-M 社会生活能力検査における社会生活年齢の値 (SA 値) は、1 歳 7 ヶ月から 13 歳以上までと幅広く、社会生活能力に大きな差のある学習集団となっている。コミュニケーション面においては、音声言語でのやりとりが難しく身振りで自分の意思を伝えることができる生徒、身近な出来事を教師に二語文で伝えることができる生徒、自分の気持ちを言葉で伝えることができる生徒、自分の意見をみんなの前で話すことができる生徒もいる。また、交流及び共同学習の授業においては、自分たちでペアをつくる際、附平中生徒を探して挨拶をする生徒、共通の趣味を通して関わることを楽しみにしている生徒、意見を伝え合いながら課題を考えることのできる生徒がいる一方、附平中生徒との関わり方にとまどいを感じている生徒もいる。

題材であるフライングディスクは、全国障害者スポーツ大会の正式競技にもなるなど、障害の有無にかかわらず誰もが楽しく取り組むことのできる競技である。また、附特支生徒は以前にフライングディスクに取り組んだ経験があり、投げ方のコツをつかみ綺麗なフォームでディスクを投げられる生徒もいる。一方、まっすぐ輪に向けてディスクを投げるのが難しい生徒もいるが、「ディスクを投げて輪に通す」というルールを理解している生徒は多い。このような状況から、交流及び共同学習の教材としてフライングディスクを取り上げることは、障害の有無

にかかわらず、附特支生徒と附平中生徒が共に楽しみながら取り組むことができると考えた。

活動の中では、生徒同士が投げ方を教え合ったり、ペアやグループでの活動を多く取り入れたりすることだけでなく、ルーブリック評価形式「目標達成シート」を用いて、双方の生徒自身が記入することで、自身の振り返りと共に相互理解を促していきたい。

3. 本時の学習指導案

本時の学習指導案については、表 2 にその概要を示す。

IV. 各授業局面の記録

表 3 に、本時（第 4 次/10 時間）の授業展開記録の概要をまとめる。記録においては、ビデオ定点撮影による動画記録を詳細に分析し、全発言及びやりとりの経過を文章化した。なお、第 3 局面から第 5 局面はグループ毎の活動であるため、附特支生徒の障害程度が中度であり、生徒同士の関わりに教師の支援が必要な B グループを分析対象として、活動を記述した。

V. 目標と各要素との関連を中心とした総合考察

本時の交流及び共同学習について、各授業局面の記録をもとに「目標」「教材」「教師の指導性」「生徒の状況」「環境」5 観点の間にある相互関係、特に「目標」と他の観点との関連性や課題を中心に分析し、授業のダイナミズムを把

表 2. 本時の学習指導案

1.日 時	平成 28 年 7 月 1 日 (金) 13:20~14:45		
2.場 所	中 1 教室・中 2 教室・中 3 教室		
3.対 象	附平中：中学 2 年生 (19 名)、附特支：中学部 1~3 年生 (17 名)		
4.授業者	MT (中心となる教師)：T1 ST (MT を補助する指導者)：T2,T3,T4,T5,T6,T7,T8,T9,T10,T11		
5.目 標	「お互いに学び合い友達に意見を聞くことができるようになるう」「課題を一緒に考えよう」 「友達がうまくいったことを喜んで、友達の失敗を励ませる関係になっていこう」 「自分が上手になったことを友達に教えられるようになるう」		
6.本時の展開	(第 4 次/10 時間)		
	授業局面	学習活動	指導の留意点・教材
	第 1 局面 【準備】 13:05~13:20	<ul style="list-style-type: none"> ・附平中生徒は、附特支に向かって出発する。 ・附特支生徒は、交流及び共同学習の準備について の話を聞く。 ・附特支生徒は中 2・3 教室の椅子を中 1 教室に運び、 附平中生徒とグループで座る準備をする。 ・附特支生徒は玄関までウェルカムボードを各グル ープで持って、附平中生徒を出迎える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・(教師で電子黒板の準備をする。) ・友達同士で協力して運ぶようことばかけ をする。※ウェルカムボード
	第 2 局面 【導入】 13:20~13:30	<ul style="list-style-type: none"> ・中 1 教室でグループごとに集まって椅子に座る。 ・始めの挨拶をする。自己紹介カードを首にかける。 ・本時の流れの説明や交流及び共同学習の全体の目 標、各グループの目標を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ※電子黒板、パソコン、自己紹介カード ・姿勢を正して挨拶をするようことばかけを する。 ・電子黒板の画面が見えやすいよう教室の明 るさを調節する。
	第 3 局面 【展開 1】 第 4 局面 【展開 2】 13:30~13:55	<ul style="list-style-type: none"> ・各グループで下記の活動場所に分かれるグループ の目標をしっかりと確認して、フライングディスクを する。 A グループ...中 3 教室 B グループ...集会室 (ベンチ椅子を使用) C グループ...中 2 教室 ・C グループはペアリングを自分たちで考える。 ・必要があれば教師に声をかけて iPad をもらい、 iPad で自分たちの投げている様子を動画で撮っ て、それを TV に写しループリックの評価を確認す る。 ・FD を 5 回投げて、ポイント表をつける。 ・FD ループリックを使って、各自で振り返りを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ※iPad、FD ループリック、筆記用具 ・A グループはビデオ撮りの課題を行うの で、投げる順番などに気をつける。 ・B グループは、教師が附特支生徒の行動を 言語化するアドバイスをを行う。 ・FD ループリックの目標達成をめざして、 FD を行うよう、必要があれば各グループ のタブレットにある手本画像を使って、そ れぞれのグループに適した方法を例示す る。 ・ループリックを見てふりかえることが難し い時は、ペアで考える等それぞれのグル ープにふさわしいやり方を支援する。
	【休憩】 13:55~14:00	<ul style="list-style-type: none"> ・トイレ、お茶休憩をとる。 	
	第 5 局面 【展開 3】 14:00~14:20	<ul style="list-style-type: none"> ・各グループで、セカンドステージで何をやりたい か、アイデアを出してみる。 (アイデアは、必ずしもできるわけではない) ・この後の発表のやり方を考える。(発表者は全員か、 代表者かなど) 	<ul style="list-style-type: none"> ・アイデアが出にくいようだったら、教師が アドバイスを出す。(嵐の歌やダンスを一 緒にする、フライングディスクゴルフをす る、大きなトーマスの絵を描いてみる、黒 ひげ危機一髪などの見てわかりやすいゲ ームの取り組みなど)
	第 6 局面 【共有】 14:20~14:30	<ul style="list-style-type: none"> ・全員が椅子等を持って、再び中 1 教室に集まる。 ・各グループが、他のグループに自分たちが考えた ことを発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他のグループの発表を静かに聞くことが できるよう、ことばかけをする。
	第 7 局面 【まとめ】 14:30~14:45	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習内容を振り返る。 交流及び共同学習のループリックを使って、各自 で振り返りを行う。 ・終わりの挨拶をする。 ・特支生徒は附中生徒を玄関まで見送る。 	<ul style="list-style-type: none"> ※交流及び共同学習のループリック ・ループリックを見てふりかえることが難し いときは、それぞれのグループにふさわし いやり方で支援する。 ・姿勢を正して挨拶をするように、ことばか けをする。
	【片づけ等】 14:45~	<ul style="list-style-type: none"> ・附平中生徒は帰校する。 ・附特支生徒は机などを元通りに片づける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達同士で協力して運ぶようことばかけを する。

表 3. 本時の授業展開記録の概要

局面・目標	記録
<p>第1局面 記録・分析</p> <p>準備： 本時の学 習につい て見通し を持つ。</p>	<p>授業が始まる前の生徒の様子としては、電子黒板に対して、生徒全員が前向きに座り、落ち着いた状態で授業の開始を迎えた。生徒は3グループに分かれて着席していた。</p> <p>まず初めに、自己紹介カードを教師が生徒に配布した。グループによっては生徒が配布している姿もみられた。配布された生徒は自己紹介カードを首からかけたが、しばらくすると、このカードで遊ぶ生徒やカードを外そうとする生徒の様子が見受けられた。</p> <p>その後、電子黒板を用いた今日の流れの説明が始まる。本時の予定が示された画面が電子黒板に映し出されると、ルビを添える、白黒反転させるなど生徒が見やすくなるような工夫がなされていることもあって、ほとんどの生徒はしっかりと前を向いて説明に注目できていた。教師から一通り説明が終わったのち、ある附特支生徒から「ペアに分かれて活動するというのはどういうことか?」という趣旨の質問がなされた。その生徒のいるグループはペアでの活動が本時まで無かったため、「ペアでの活動」の具体的イメージがない様子だった。</p> <p>最後に「そろそろ良い時間なので、迎えに行きましょう」という合図により、生徒はグループごとに教室を出て附平中生徒を迎えに行く。第1局面の終わり頃には、集中が切れた様子で、言葉を発する生徒がみられた。</p>
<p>第2局面 記録・分析</p> <p>導入： 本時の予 定を知る。 本時の目 標を知る</p>	<p>初めに、附特支生徒により挨拶の掛け声がなされた。「起立」等の号令に合わせて全員が挨拶を行うことができた。生徒の様子としては、附平中生徒が加わることで、頻りに後ろを振り返ったり、自己紹介カードで遊んだりするなど、附特支生徒の中には落ち着きのない生徒の様子が見られた。一方で、附平中生徒や多くの附特支生徒は電子黒板の方を向き、教師の説明を聞くことができていた。附特支生徒にとっては同様の内容を第1局面でも取組んでおり、第2局面でも繰り返し、本時の予定について説明を聞くことになった。</p> <p>次の各グループの目標を知る場面では、グループ別にスライドが作成されており、そこに目標が記載されていたため、グループごとに目標が異なるということが明確になった。教師により口頭での説明と、電子黒板の文字による説明が行われたが、障害の程度の重い生徒を中心に、説明に集中できていない生徒もみられた。なお、目標の内容については、障害の程度の重い生徒が含まれるグループでは、附特支生徒と附平中生徒で目標を分けて提示されていた。</p>
<p>第3局面 記録・分析</p> <p>グループ 活動①： グループ での活動 の予定を 知る。 グループ の目標を 再確認す る。 ペアで呼 び合って フライン グディス クを投げ る。</p>	<p>Bグループは活動場所を移動し、集会室での活動となった。附特支生徒と附平中生徒が別々に着席していたため、T2からの言葉かけでペアの生徒同士で隣り合って着席するように移動した。はじめに横一列のベンチ椅子に生徒が座り、教師が本時のグループ活動の流れと目標を再確認した。どの生徒もペアで隣り合って座っており、全員が落ち着いて座っている。教師が、予定と目標を再確認した後に「わかりましたか?」と尋ねるが、生徒の反応は少なく、教師に促されてやっと返事が聞こえる程度であった。</p> <p>次にフライングディスクを用いた活動に入り、ペアごとに、一人が投げ、もう一人がゴールの輪の奥で投げ手を呼んでいた。「こっちやで」という掛け声を呼び手は行うように教師から促されるが、ほとんどの生徒が控えめであった。特に附平中生徒はなかなか声を出して呼ぶことができず、とまどっていた。この活動では、フライングディスクが輪の中を通った数を記録していくが、生徒同士またペア同士で競い合うようなことは無く、自分で記録を覚えておき、後に記録用紙に記入することになっている。</p> <p>その後、ゴールの輪の奥に「目立つもの」を置き、フライングディスクを投げることで、輪に通るやすくなるかを確認するための活動を行う。まず、教師が指名したペアの生徒が「目立つもの」として、「ピンク色の椅子」を選択し、附平中生徒と附特支生徒が協力して、椅子を輪の奥に設置した。次に、先ほどと同様にペアごとにフライングディスクに取り組んだ。活動の途中に徐々に笑顔がみられるようになってきたが、依然として掛け声は控えめであり、緊張している生徒の様子もみられた。フライングディスクを投げる順番を待っている生徒は応援するように教師から促されるが、教師にことばかけされたときに声を出し応援する程度であり、意欲的に応援することが難しいようであった。特に附平中生徒は恥ずかしさからか、なかなか声を出して応援することができていない。また附特支生徒の中には、集中力が続かず、活動とは関係のない場所を眺めている様子が見られる生徒もいた。</p>
<p>第4局面 記録・分析</p> <p>グループ 活動②： ペアの絆 を深める。</p>	<p>教師から、「ペアの絆を深める」ためにこの活動を行うという目標が伝えられたうえで、ペアで距離をとり、キャッチディスクに取り組んだ。初めは、生徒同士の言葉かけが少なく、控えめであったために、教師が「いくよ」「上手」などの言葉かけを行い、生徒にも促していた。また、「相手のことを考えて投げて」「今のは取りやすいかな」等の言葉かけを教師が行うことで、生徒に「相手を意識して投げる」というねらいを伝えていた。</p> <p>この取り組みの中で、時間経過と共に、どの生徒にも笑顔がみられるようになってきた。言葉をかけ合うことは難しいようであるが、顔を見合わせてキャッチディスクを行うことで、表情や仕草でのやりとりが可能となっていた。特に言葉によるやり取りが少ないペアには教師が傍に立ち、雰囲気盛り上げ、言葉かけを例示していた。活動後、教師が「楽しかったという人」と尋ねると、全生徒が挙手していた。</p>

<p>第5局面 記録・分析</p> <p>グループ 活動③: 話し合い を通して、 取り組み たいこと を決定す る。</p>	<p>初めに、生徒がベンチ椅子に横一列に座り、教師と話す内容を確認した。同時に、第3局面において、フライングディスクの成功回数を記録し忘れていたため、急遽、本局面で記録用紙に記録することになった。ペアで話し合いをすることと、記録用紙に記入するという作業が並行して行われた。話し合いの様子では、附特支生徒の実態に応じて、生徒同士で話を進められるペアと教師が仲介することで初めてやりとりができるペアがあった。</p> <p>生徒同士で話を進められるペアでは、どのようなダンスをしたいか、どのような楽器の演奏をしたか等、話を深めていた。話し合いがひと段落すると、附平中生徒が「ダンス覚える？」と附特支生徒に尋ね、「うん」と応じるような会話もみられた。生徒同士で話を進められるペアでは、附平中生徒と、附特支生徒だけでは話し合いが進んでいない様子であったため、教師を交えて3人で話し合う様子がみられた。横一列の座席では話しにくいと教員が判断して助言し、座席を動かし互いが向き合うように座席配置を修正する様子もみられた。</p> <p>話し合いの後、意見を発表する場面では、教師から指名された附平中生徒が進行・書記役となり、話し合いの結果を取りまとめた。ペアごとの意見を確認する場面では、附平中生徒が答えるペアもみられたが、附平中生徒が発言に行き詰った時に附特支生徒がサポートするペア、附特支生徒が答えるペアなど様々な発表の仕方がみられた。全てのペアから意見が出されたところで、教師が「意見を参考にしながら、2学期にやることを決めていきたいと思います」と締めくくり、話し合いが終了した。</p> <p>その後、目標達成シートが配布され、生徒は各自で活動を振り返り、記入していた。教師から「特支の子が分かりづらそうと思ったら、ペアの人、助けてあげてください」という言葉かけがあったので、附平中生徒が、目標達成シート中の用語を説明したり、共に考えながら記入したりする様子が見られた。</p>
<p>第6局面 記録・分析</p> <p>共有: 各グルー プが、自分 たちが取 り組んだ ことを発 表する。</p>	<p>生徒はグループごとに座っているが、活動の直後で、少し落ち着かない様子である。しかし、グループごとの発表が始まると、静かに発表を聞くことができていた。初めに、教師が「発表をしたいグループはありますか」と尋ねると、全グループから挙手があったので、教師がグループを指名し、順に発表することになった。</p> <p>発表では、グループごとに代表のペアが前に出て、フライングディスクの活動の報告と、2学期以降に取り組みたい活動の報告を、口頭で伝えた。どのペアも活動の記録用紙をもとに発表していたが、附平中生徒が主に発表しており、附特支生徒が発表する機会は少なかった。各ペアの発表が終わるごとに、教師がそのグループの活動の様子を全体に向けて報告するとともに、話し合いの結果についてコメントしていた。</p> <p>発表を聞いている生徒の様子は、発表者の声がやや小さく聞こえづらい面もあったようで、途中から集中力が切れている附特支生徒の様子もみられた。</p>
<p>第7局面 記録・分析</p> <p>振り返り: 本時の学 習内容を 振り返る。 等</p>	<p>同様の形式で振り返りを行うのは3回目であり、生徒も慣れてきた様子である。自然とペアで一緒になって、ルーブリックに振り返りを記入したり、意見を交わしたりする様子がみられた。特に重度の障害のある生徒たちのグループでは、附平中生徒が寄り添い、附特支生徒の顔を見ながら、本時の学習の振り返り、ルーブリックに記入していた。電子黒板には「目標達成シート」が大きく映し出されていたので、附特支生徒にとってもこれから何をするのかということがわかりやすかった。</p> <p>次の活動を確認する場面では、電子黒板に「9月」という文字を画面に大きく提示され、どの生徒もよく見ていた。最後に、T1からの「楽しかったですか？」の問いに、附特支生徒が「はい」と元気に挙手し、それに追随するように周囲の生徒も挙手していた。</p>

握しながら、関係性や修正点を明らかにした。以下の「表4. 目標と各要素との関連を中心とした各局面の総合分析」は、「目標」と他の観点との関連性や課題を中心に、総合考察の中で抽出された項目と、考察によって明らかになった課題や改善案を整理した表である。なお、課題・改善案においては、授業全体に関わる項目と、局面に特徴的な項目とを整理し、表記した。

VI. まとめと今後の課題

本稿では、大阪教育大学附属特別支援学校中

されたフライングディスクを題材とした交流及び共同学習を、各授業局面に分けて記録し、分析・考察においては、「目標」「教材」「教師の指導性」「生徒の状況」「環境」5観点の間にある相互関係、特に「目標」と他の観点との関連性や課題を中心に、授業のダイナミズムを把握しながら、関係性や修正点を明らかにした。総合的質的授業分析とするこの分析方法では、授業局面ごとの指導目標を評価規準として、発問・言葉かけ・教材提示・環境設定等が適当であるか、把握することができた。知的障害等のある児童生徒の授業を分析し改善を図る授業研究手

表 4. 目標と各観点との関連を中心とした各局面の総合分析
(抽出項目内①～⑦の番号は各授業局面を示す。)

各局面の目標	抽出項目	課題・改善案
「目標」と「教材」の関連性	<p>第1局面 準備：本時の学習について見通しを持つ。</p> <p>第2局面 導入：本時の予定を知る。</p> <p>第3局面 グループ活動（1）：グループの活動の予定を知る、グループ目標を再確認する、ペアで呼び合ってフライングディスクを投げる。</p> <p>第4局面 グループ活動（2）：ペアの絆を深める。</p> <p>第5局面 グループ活動（3）：話し合いを通して、取り組みたいことを決定する。</p> <p>第6局面 共有：各グループが、他のグループに自分たちが取り組んだことを発表する。</p> <p>第7局面 振り返り：本時の学習内容を振り返る、ルーブリックを使用しペアで協力して振り返る、次回の活動を確認する。</p>	<p>【全体】</p> <ul style="list-style-type: none"> 緊張をほぐす活動や個々の感じたことの発表を通して、活動への動機づけを十分に高める必要があるのではないか。 ペアでのキャッチディスク実演等、ペア活動の成果を発表する機会を設定するべきではないか？ フライングディスクの結果や、話し合いの内容の例示等の提示は、障害の有無に限らず、全員が視覚的に把握できるように、ホワイトボードや電子黒板に表示するべきではないか？ 電子黒板等での情報提示は、附特支生徒にとって有効ではあるが、情報過多のこともありえる。全体と個別で情報提示の質を調整・配慮すべきではないか。
「目標」と「授業者」の関連性	<p>②第一局面と同じ説明を、もう一度繰り返し説明していた。附特支生徒にとっては3つのグループの「目標」を理解することは難しいことが想定される。障害の程度の重い生徒のグループでは、附特支生徒と附平中生徒で分けて目標を提示したが、目標の区別は交流の妨げになるのではないか。</p>	<p>【第1局面】</p> <ul style="list-style-type: none"> 第2局面に向けた動機づけとしての内容に絞り、「自己紹介カード」はまだ手渡さなくてもよいのではないか。 <p>【第2局面】</p> <ul style="list-style-type: none"> 「自己紹介カード」はできるだけ生徒が配布するように設定することで、生徒の主体的な活動を促せないか。 各グループの目標については、T1の口頭説明を附平中生徒がメモに書き取る方法等で、ポイントを押さえるように指導するべきではないか。 全体に共通する予定と目標を押さえることを重視し、各グループの目標については、グループごとで確認しても良いのではないか。 <p>【第3局面】</p> <ul style="list-style-type: none"> フライングディスクの活動に輪っかを通して数を競い合う等の設定を取り入れた方が、ゲーム性が高まり、意欲的で交流のある活動になったのではないか。 <p>【第4局面】</p> <ul style="list-style-type: none"> ペアでの活動の成果を発表し認め合う機会を設定しても良いのではないか。
「目標」と「生徒」の関連性	<p>①前半は質問する生徒もいたが、後半は集中力を失う生徒もいた（特に障害の程度が重い生徒）。</p> <p>②附特支生徒の注意力が散漫で、後ろを振り返ったり、首からかけた「自己紹介カード」で遊んだりする生徒の姿が見受けられる。</p> <p>③予定と目標を再確認した後に「分かりましたか？」と尋ねるが、生徒の反応は少なかった。「こっちやで」という掛け声を呼び手は行うように教師から促されるが、ほとんどの生徒が控えめ。特に附平中生徒はなかなか声を出して呼ぶことができず、戸惑っていた。</p> <p>④ペアでのキャッチディスクでは、笑顔がみられ、互いの顔を見合わせて取り組む姿がみられた。終わったあと、「楽しかった人？」と問うたところ、全員が挙手していた。</p> <p>⑤教師が仲介することで初めてやりとりができるペアでは、生徒間のやりとりに戸惑いがみられた。</p> <p>⑥発表者が附平中生徒に偏っていた。</p> <p>⑦ルーブリックを使用し、附平中生徒が附特支生徒に寄り添う形で振り返っていた。</p>	<p>【第5局面】</p> <ul style="list-style-type: none"> 話し合いの場面で、ペア同士で向き合って座れる椅子を用意するなど、場面に応じた学習環境を用意するべきではないか。 <p>【第6局面】</p> <ul style="list-style-type: none"> 附特支生徒が発表しやすいような“発表シー
「目標」と「環境」の関連性	<p>②障害の程度が重いグループでは、附平中と附特支で目標が違うことは、交流にとって妨げになるのではないか。</p> <p>③ペアでの活動に取り組めていないグループが一部合って、指示理解に差があった。</p> <p>③ゴールの輪の奥に「目立つもの」を置き、フライングディスクを投げることで、輪に通</p>	

<p>やすくなるかを確かめるための活動に取り組むが、活動の途中で徐々に笑顔がみられるようになってきた。 フライングディスクが輪の中を通った数を自分で覚えて、後で記録用紙に記入していくルールだったが、生徒同士またはペア同士で競い合う設定ではなかった。 ⑤話し合いの場面で、すべてのペアが横一列に座っており、話がしづらい状況だった。 ⑥互いの発表場面で、声が小さいために聞き取れずに集中がとぎれていた生徒がいた。</p>	<p>ト”などを用意するべきではないか。 ・生徒の実態に応じて、マイク等の機器を用意するべきではないか。 【第7局面】 ・振り返りでは、電子黒板に活動の様子を表示するなど、具体的な情報提示があってもよいのではないか。振り返りを肯定的に印象づけられるように、最後にハイタッチをして終わるなどの設定があった方がよいのではないか。</p>
---	--

法として、特にその目標設定のあり方が問われる交流及び共同学習の実践においては、有効な方法であると考えられる。

一方、本稿における総合的質的授業分析では、授業全体の目標及び各授業局面における目標を評価規準として扱い、分析と考察を進めたが、交流及び共同学習に取り組む両校生徒の実態や経験に応じた目標設定の妥当性についても、検討が必要である。また授業改善に向けては、総合考察で示された課題や改善案を修正するだけでなく、学習活動のダイナミズムを考慮して、授業全体の構成自体の修正も必要である。さらに、経験による学びの質に個人差が生じやすいと思われる交流及び共同学習においては、連続した学習活動によって教師が何を指導し生徒が何を学ぶのか、単元全体の構成自体を把握し見直すことが、より重要である。

今後、交流及び共同学習の実践を分析・考察し、実際の授業のあり方の改善につなげるためには、より系統性や総合性の高い観点や方法論が必要である。本稿の分析及び考察は、具体的な授業改善に向けた手続きの一部と位置づけ、今後さらに具体的な手続きや方法論を検討する必要がある。

なお、附特支における本年度の交流及び共同学習は年間を通じて行われており、授業分析の対象としたのは1学期に行われた授業である。その後、附特支および附平中の教師により、授業は毎回改善が図られており、本論文で課題として挙げた点にも既に修正が加えられている部分があることを最後に付け加えておきたい。

文献

石川衣紀・田口眞弓・高濱功輔・北村由紀・森小夜子・佐藤弘章・堺雅子・長友睦子・野坂知布・吉田ゆり・高橋甲介（2016）附属中学校と附属特別支援学校における交流及び共同学習・障害理解教育の実践的研究，長崎大学教育学部附属教育実践総合センター紀要，15，37-51.

大阪教育大学附属特別支援学校（2016）大阪教育大学附属特別支援学校年報平成27年度.

小野智弘（2014）中学生の障害児との交流及び共同学習に対する意識：3年間の継続的な取り組みの成果，宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター研究紀要，22，39-52.

富永光昭・樋口知里（2009）小学校の特別支援学級における環境教育の授業分析研究--実態把握（Assessment）-授業計画（Plan）-授業実施（Do）-総合的質的授業分析（Check）-再授業計画（Replan）（APDCR）のリサイクル過程を通して，大阪教育大学紀要 第4部門 教育科学，58(1)，129-149.

文部科学省中央教育審議会（2016）幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について，<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm>，（最終閲覧日：2018年1月31日）.

謝辞

本論文における授業実践の研究のために、大阪教育大学附属特別支援学校と大阪教育大学附

属平野中学校の交流及び共同学習に関わらせていただいたことを大変感謝しております。大阪教育大学附属特別支援学校中学部の先生方、大阪教育大学附属平野中学校の先生方には、ご多用の中、授業分析や聞き取り調査などで、多大なるご協力をいただき、ここに記して御礼を申し上げます。

Theory and Practice of Exchanges and Joint Learning with Disabilities and Those Non-Disabled, Based on Playing by the Flying Disc
-The Study by Synthetically Analysis of Teaching-Learning Quality with Five Evaluation Points-

NAGASAWA Hironobu, HACHIYA Kohei, ASAMA Koichi,
HIRANUMA Motoshi & TOMINAGA Mitsuaki

This study had two purposes, as follows. The first purpose was to record the different phases of each process concerning the exchange activities and collaborative learning involved in using a flying disc, which were conducted in a special needs junior high school for students with intellectual disabilities and another junior high school. The second purpose was to analyze the relationships and dynamics between these five points: the “aim,” “teaching materials,” “leadership of the teacher,” “situation of the student,” and “environment.” The results of this analysis were as follows. First, we were able to analyze whether the questioning, encouragement, teaching material presentation, and setting of the environment as evaluation standards for the teaching practices in the different phases of each learning process were appropriate. Second, we were able to derive several suggestions for future improvements in the lessons mainly by analyzing the relationships between lesson arrangement and the problems with the “aim” and other points.